

石濱純太郎展

2023年6月3日(土) — 7月29日(土)



大阪大学総合学術博物館

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-20 TEL.06-6850-6284
https://www.museum.osaka-u.ac.jp/

主催：大阪大学総合学術博物館、大阪大学人文学研究科

協力：大阪大学附属図書館、大阪大学外国語学部、大阪

大学文学部、一般財団法人 懐徳堂記念会

- ・作品番号は会場内の番号と一致しますが、展示の順番とは必ずしも一致しません。
- ・都合により、展示作品・展示期間を変更する場合があります。
- ・会期、展示作品等は今後の諸事情により変更する場合があります。
- ・解説はすべて堤一昭（大阪大学大学院人文学研究科・教授）が執筆しました。
- ・所蔵先の記載のない資料はすべて「大阪大学附属図書館」の所蔵です。

1 住吉の自宅書斎での石濱純太郎

大阪・住吉の自宅2階の書斎で読書する石濱純太郎。彼の風貌から1950年代の写真と思われる。本棚や床の上にも書物が積み重ねられている。彼の家には若き研究者や作家が集い、“石濱サロン”とも呼ばれた。石濱の没後、これらの書物をはじめとする膨大な量と高い質の研究資料は大阪外国語大学附属図書館に「石濱文庫」として収められた（現在は大阪大学附属図書館所蔵）。

2 『鐵雲藏龜』・『鐵雲藏龜釋文』

1903年(光緒29) 劉鶚 清

甲骨文(甲骨文字)とは、古代中国の殷代後期(紀元前13世紀)に現れた最古の漢字の書体である。殷の王は甲骨(亀の腹甲や牛などの肩甲骨)に熱を加えて生じたひび割れの形を見て吉凶を占い、日付・内容・吉凶の判断・結果などをその甲骨に刻み込んだ。

甲骨文は、偶然のきっかけから発見された。清朝末期の1899年(光緒25)、「金文」学者でもあった高級官僚の王懿榮が自分のマラリア治療の薬として取り寄せた「竜骨」(実は甲骨)の表面に古い

文字が刻まれているのに気づき、寄宿する劉鶚(字は鐵雲)とともに研究を始めた。『鐵雲藏龜』『鐵雲藏龜釋文』は、集めた甲骨の拓本と解説を石版印刷で劉鶚が公刊したもので、甲骨文研究の最初となる記念碑的な著作である。

○拓本とは？

刻まれた文字・模様など、凹凸のある石碑や青銅器に湿らせた紙をあて、“たんぼ”(綿を布でくるんでくったもの)などで上からたたいて密着させ、さらに墨をふくませた“たんぼ”で軽くたたき、文字などを浮かび上がらせるもの(湿拓)。乾いた紙を用いる方法(乾拓)もある。もとの資料に紙を直接あてて採った拓本は「原拓」と呼ばれ、高い技術が必要で文化財・美術品としても高く評価される。石濱文庫の拓本の大部分は「原拓」である。

3 『殷墟善契前編』

1912年(民国1) 羅振玉 中華民国

4 『殷墟善契考釈』

1914年(民国3) 羅振玉 中華民国

王懿榮と劉鶚の研究を引き継いだ羅振玉と王国維は、甲骨が発掘される遺跡(殷墟)の調査・

発掘を試みた。1911年の辛亥革命により清朝が滅びると、羅振玉と王国維は日本に亡命し、旧知の東洋学者、内藤湖南・狩野直喜（二人とも京都帝国大学教授）を頼って京都に住み、新たな学术交流が始まった。『殷墟書契前編』は甲骨の拓本を日本でコロタイプ印刷により公刊したものであり、『殷墟書契考釈』では文字の解読、文章の分類などの研究を行っている。

石濱純太郎は甲骨文研究に関心を持つとともに、羅振玉の子・羅福成らと西夏文字研究で交流があった。そのため、石濱文庫には甲骨文研究の書籍が豊富に所蔵されている。

5 『観堂集林』

1923年(民国12) 王国維 中華民国

『観堂集林』は王国維の論文集で、そこに収められた「殷卜辞中所見先公先王考」は甲骨に現れる殷の祖先神の名や系譜が司馬遷『史記』などの文献の中でどのように表現されているかを考証したもの。彼の研究により、中国神話と考古学的発掘から得られた成果とが結び付けられ、中国古代史研究に新たな画期となった。「観堂」は王国維の号。彼が京都に住んでいた時、近くの寺院「永観堂」にちなんで名乗ったといわれている。

6 散氏盤 [拓本(複製)]

前9世紀～前8世紀 西周

殷代後期から秦・漢の時代まで、祖先祭祀、儀礼などの内容を記した文を青銅器に鑄込むことが行われた。青銅器(金属)に記された文章は「金文」と呼ばれる。「散氏盤」は、西周時代の散という小国の領地争いのいきさつを記した文章を、水を入れる手洗いの容器(盤)の形をした青銅器の内側に鑄込んだもの。

「散氏盤」はもと清朝の宮中にあり、中華民国になって故宮博物院の所蔵となり、拓本の複製もひろく流布して知られるようになった。青銅器の外側の文様、内側の銘文の配置が分かるように拓本が作られている。

7 『両周金文辞大系』

1932年(民国19/昭和7) 郭沫若 中華民国

8 『両周金文辞大系図録』

1935年(民国24/昭和10) 郭沫若 中華民国

著者の郭沫若(1892年～1978年)は、中国現代文学、歴史研究、政治の各方面で活躍した知識人。1913年から日本に留学して医学を学ぶかわら、文学活動、政治活動も開始した。日本での亡命時代には、中国古代史や金文などの古文字の研究に没頭した。その成果がこの両書であり、現在でも金文研究の基本書である。

9 嵩山開母廟石闕銘 [拓本]

123年(延光2) 後漢

河南省・洛陽近くの嵩山は古代から崇拝の対象とされてきた。その南麓に後漢時代、殷に先立つ夏王朝の始祖・禹の妃で次の王・啓の母を祭った廟が建てられた(後に開母廟と改称)。参道の門(石闕)には篆書で建設の由来が記されている。左端には、杵で臼をつくウサギの姿が浮き彫りにされ、当時の信仰をうかがうことができる。

「篆書」は、秦の始皇帝の文字統一(紀元前221年)の際に、宰相の李斯が作ったとされる。縦長で丸みを帯びた書体で、その後も詔書や碑文など何らかの権威が求められる場で使用され続けた(10はその例である)。現在の日本でも印鑑に篆書が用いられるのは、ここに起源がある。

10 豆盧寔墓誌銘(蓋) [拓本]

613年(大業9) 隋

豆盧寔は隋時代の貴族。正史の『隋書』には、584年(開皇4)に彼が南朝の陳への使者となったことが見える。隋の煬帝の大業9年に没し、洛陽近郊に葬られた。

墓誌銘とは、地下の墓室に副葬される平たい四角形の石(墓誌)の上面に刻まれる故人の経歴を記した文章をいう。墓誌の石の上に台形の蓋がかぶせられ、その上面には墓誌銘の題名が略記される。

この墓誌銘の蓋には篆書で「大隋故金紫光禄大夫豆盧公墓誌之銘」と刻まれる(墓誌銘の本文は隸書)。「金紫光禄大夫」は従二品の高官で、墓誌の石の大きさ(71cm×71cm)とともにその権勢をうかがうことができる。

11 韓仁銘 [法帖]

175年(熹平4) 後漢

韓仁という地方官の功績をたたえ、その死を悼

んで祭祀を命ずる文書を石碑に刻んだもの。漢代の隸書として名高い。13世紀の金代末期に土中から発見されたいきさつも石の余白に追刻されている。「隸書」は篆書から生まれ、秦・漢時代に広く使われた書体で、平たく直線的な特徴を持つ。もとの石碑からとった拓本を短冊状に切り貼りして、法帖のかたちにしあげている（剪装本。せんそうぼん）。「法帖」とは、名人の書跡を石や板に刻んで拓本をとり、鑑賞や学習に便利のように折本仕立てにしたものをいう。なお本資料は、漢学に造詣の深かった明治期の軍人・大村楊城の旧蔵品。

12 ^{そうぜんひ}曹全碑 [法帖]

185年(中平2) 後漢

曹全という地方官の経歴と功績を石碑に刻んだもの。文中には後漢時代末期の西域状勢、党錮事件、黄巾の乱に関わる記述があり、歴史資料としても重要である。16世紀末、明代の万暦年間に土中から発見され、陝西省の西安碑林に現存する。漢代の隸書の傑作として、本資料のような法帖のかたちで多く学ばれた。11と同じく大村楊城の旧蔵品。

13a ^{そんしゅうせいとうぞうぞうき}孫秋生等造像記(龍門四品) [拓本]

502年(景明3) 北魏

龍門石窟は河南省・洛陽の南を流れる「伊水」の東西の岸壁にある。北魏の孝文帝の洛陽遷都(494年)前後から唐時代まで、多数の石窟と仏像が彫られた。仏像のかたわらに造像の由来と冥福の祈願などを記した「造像記」も刻まれており、龍門石窟全体で約2800の造像記が現存する。石瀆文庫には龍門石窟造像記の拓本800点あまりを所蔵する。

清代から造像記の書の再評価がなされた。特に龍門石窟の古陽洞に現存する最高傑作4点は「龍門四品」と呼ばれて楷書の初期の代表例とされる(20点を選んだ「龍門二十品」もある)。「楷書」の楷は手本の意味。後漢後期から形成され、唐の褚遂良(14の人物)らで完成された。「孫秋生等造像記」には、上部に孫秋生ら二百人が協力した由来、下部にその名前が刻まれている。

13b ^{ようたいがんだうぞうぞうき}楊大眼造像記(龍門四品) [拓本]

5世紀末～6世紀初 北魏

「龍門四品」の一つで、500年～506年の間に孝文帝の冥福のために楊大眼が造像させたもの。正史の『魏書』に彼の列伝があり、歴戦の勇将であったこと、漢字をあまり知らず、人に書を読ませて学んだこと、命令は口述させたことなどが記される。

13c ^{ざいれいぞうぞうぞうき}魏靈藏造像記(龍門四品) [拓本]

5世紀末～6世紀初 北魏

「龍門四品」の一つで、500年～504年の間に地方官の魏靈藏と薛法紹が釈迦像を造らせた由来を記す。13bの「楊大眼造像記」の字とよく似ている。左上から右下に石の亀裂が見えるが、全体として字の保存状態が良い。

13d ^{しへいこうぞうぞうき}始平公造像記(龍門四品) [拓本]

498年(太和22) 北魏

「龍門四品」の一つ。字の部分が凸面となるように彫った「陽刻」であるため、拓本では字が黒く示される。比丘(出家修業する男子僧侶)の慧成が亡父の始平公のために造像した由来を記す。

14a ^{いけつぶつがんに}伊闕佛龕碑(碑身) [拓本]

641年(貞観15) 岑文本(撰)、褚遂良(書) 唐

14b ^{いけつぶつがんに}伊闕佛龕碑(額) [拓本]

641年(貞観15) 岑文本(撰)、褚遂良(書) 唐

「伊闕佛龕碑」は、龍門石窟の賓陽洞の外側の岩壁に浮き彫りされている。賓陽洞は唐の太宗・李世民の第四子の李泰が生母の冥福を祈るために造営したもので、碑文はその由来を記す。「伊闕」とは伊水の東西の岸壁を門(闕)に見立てた表現、「佛龕」は仏寺、石窟寺院をいう。

碑文本体の上部中央に突出した部分を「(碑)額」といい、碑文の題名を記す。「伊闕佛龕碑」の額は篆書で記されている。碑文は、唐の太宗に仕えた書家・褚遂良(596年～658年)が四十六歳の時の書で楷書の名品として名高い。この拓本は切り貼りを施していない一枚ものの「整拓」であり、碑が剥落した現在では、碑の原型を知りうる貴重な資料である。

15 ^{おうぎししよしょうようせんじもん}王羲之書鍾繇千字文(鬱岡齋墨妙) [法帖]

1611年(万暦39) 王肯堂(編) 明

「千字文（せんじもん）」は、6世紀に中国・南朝の梁の武帝が周興嗣に作らせた、一千字のすべて異なる漢字で作った「天地玄黄、宇宙洪荒」で始まる四言古詩 250 句。漢字を学ぶ初歩の教科書として、日本も含めて広く用いられた。

本資料は3世紀の三国時代の書家・鍾繇が作った千字文を4世紀の東晋の書家・王羲之が書き写したと称し、「二儀日月、雲露巖霜」で始まる行書の作品である。おそらくは後世の偽作。大村楊城の旧蔵品。なお「行書」は隷書から生まれ、王羲之の書簡に見られるように芸術的に洗練されて、楷書と草書の間のもっとも日常的に使われる書体となった。

16 宋米南宮書 [法帖]

11世紀～12世紀 米芾(書) 北宋

米芾(1051年～1107年)は、北宋時代の書家。礼部(別称は南宮)の官を経たことから「米南宮」と称された。米芾が唐の杜甫の詩「戲題王宰画山水図歌」を書いた書跡を刻んだものと思われる。石濱文庫には草書の資料は少なく、本資料の書もむしろ草書にやや近い行書というべきである。大村楊城の旧蔵品。

「草書」は隷書を崩して形成された早書きのための書体。「草」は簡便の意味。行書や楷書の影響を受けつつ発展したが、筆画の省略のために識別が難しい場合もある。

17 薬師寺佛足石歌碑銘 [拓本]

753年(天平勝宝5) 日本・奈良時代

「佛足石」とは釈迦が没した際の足跡の図像を線刻で刻んだ石で、原始仏教の時代から信仰の対象であった。奈良時代に唐から伝わり、奈良の薬師寺の大講堂にも現存する。その横に「佛足石歌」碑が立つ。碑には、漢字一字一音の漢字表記、いわゆる「万葉仮名」で仏をたたえる 21 首の歌が刻まれる。日本語表記のための漢字利用の早い例である。

「御足跡(みあと)作る、石の響きは、天に到り地さへ揺すれ、父母がために、諸人のために」など。

18a 道宗皇帝哀册(契丹文・蓋) [拓本]

1101年(乾統1) 遼(契丹)

18b 道宗皇帝哀册(契丹文・身) [拓本]

1101年(乾統1) 遼(契丹)

遼(916年～1125年)は、モンゴル系契丹人の建てた国である。道宗皇帝(在位 1055年～1101年)は第8代の皇帝。現在の中国・内モンゴル自治区巴林左旗近郊で、20世紀初めから道宗とそれに先立つ二代の皇帝の陵墓(総称して慶陵という)が発掘され、契丹文2組4面・漢文5組・11面の「哀册」碑石が出土した。

「哀册」は皇帝や皇后の生前の功德をたたえた哀悼の文章で埋葬の際に朗読された。もとは玉などの札を連ねた形状(册)だったが、この哀册は本体と蓋との2面で1組となる墓誌の形状である(10豆盧寔墓誌銘の説明参照)。

この哀册は本体、蓋ともに契丹文字(契丹小字)で記されている(蓋は契丹小字の篆書体)。契丹文字は、遼の太祖・耶律阿保機が作った契丹大字と、その数年後に弟の迭剌が作った契丹小字の二種類がある。資料の残存数が多くないため、現在も完全な解読にはいたっていない。

19a 宣懿皇后哀册(契丹文・蓋) [拓本]

1101年(乾統1) 遼(契丹)

19b 宣懿皇后哀册(契丹文・身) [拓本]

1101年(乾統1) 遼(契丹)

遼の道宗皇帝の妻、宣懿皇后の契丹文の哀册。宣懿皇后は皇帝の姻族、蕭氏の出身で政争の中で亡くなった。後に道宗との合葬の際に皇后のおくり名を贈られた。皇帝の哀册と同じ大きさであるが、記載の文字数はやや少ない。

20a 重修護国寺感通塔碑(西夏文面) [拓本]

1093年(天祐民安5) 西夏

20b 重修護国寺感通塔碑(漢文面) [拓本]

1093年(天祐民安5) 西夏

「重修護国寺感通塔碑」は、片面が西夏文字、もう片面が漢字の石碑で、甘肅省武威県(涼州)文化会館内に現存する。西夏文面の額には篆書体の西夏文字が二行、左右に天女が刻まれ、本文は楷書体の西夏文字である。漢文面の額は篆書で「(涼州)重修(護国)寺感(通塔)碑銘」、本文は塔の建立の由来が記され、末尾の「天祐民安五年」により、建立の年も判明する。この西夏文・漢文バイリンガルの碑文は、西夏文字解読の重要

資料となっている。

西夏文字は、11世紀にチベット系タングート人の言語の西夏語を表記するための文字で、西夏の初代皇帝・李元昊^{りげんこう}により制定された。漢字の構成にならい、冠^{かんむり}・偏^{へん}・旁^{つくり}・脚^{あし}の要素を四角くまとめた文字で、形声字・会意字が主体の約六千字。縦書きで、行は右から左に向かって書く。バイリンガル資料、対訳語彙集などを手がかりに、現在ではほぼ解読されている。

21 『番漢合時掌中珠』^{ばんかんごうじしょうちゅうしゆ} [複製]

1190年(乾祐21)(原本) 骨勒茂才 西夏

『番漢合時掌中珠』は、西夏の骨勒茂才^{こつりくもさい}が著した西夏語と漢語の対訳語彙集。20世紀初め、ロシアのコズロフ探検隊がカラ・ホト遺跡(黒水城。現在の中国・内モンゴル自治区)で発掘した断片を、羅振玉とその子の羅福成が復元して複製本を1924年に刊行した。1930年には、石濱純太郎とニコライ・ネフスキーが共同でこの複製本に欠けた部分を発表している。

対訳は縦書き4行を使い、中央左側に漢語、右側に西夏語を対照させ、さらに漢語の左外側に西夏文字で、西夏語の右外側に漢字で音写を添えている。西夏文字の解読・復元の重要資料である。

22 石濱純太郎「西夏語訳呂惠卿孝経伝」^{せいかごやくりよけいけいこうきょうでん} [抜刷]

1956年(昭和31) 日本

ソビエト連邦に帰国していたネフスキーが、コズロフ探検隊のカラ・ホト遺跡からの発掘資料中から「草書に近い行書」の西夏文字で書かれた書物を見出した。儒教の古典『孝経』に北宋の呂惠卿が「伝」(注釈)を付けたものと判明したことを、書簡で石濱に報告している(57の資料)。その後も彼は関連資料を石濱とやりとりしていた。ネフスキーの死で中断したこの書の研究を石濱は引き継いで、この論文を公刊した。

23a 大金得勝陀頌碑^{だいきんとくしょうだしょうひ} (女真文面・碑身) [拓本]

1185年(大定25) 金

23b 大金得勝陀頌碑^{だいきんとくしょうだしょうひ} (女真文面・額) [拓本]

1185年(大定25) 金

金(1115年~1234年)は、ツングース系女真人の建てた国である。この碑は吉林省扶余県に現存する。片面には漢文、片面には同じ内容の女真

文を刻む。第5代皇帝の世宗が巡幸のおり、この地が金の初代皇帝・完顔阿骨打^{わんげんあくだ}の遼への挙兵、戦勝の地であることを記念して建てたものである。

女真文字は女真語を表記するための文字で、表意文字と表音文字の混合である。完顔阿骨打が作らせた大字と第3代皇帝の熙宗が作らせた小字とがあり、碑文には両方が混在すると考えられている。

24a 華夷訳語・女直館雜字^{かいやくご じょちよくかんざつじ} [写真]

1407年(永楽5)以後 明

24b 華夷訳語・女直館来文^{かいやくご じょちよくかんらいぶん} [写真]

1407年(永楽5)以後 明

『華夷訳語』とは、中国・明代から清代にかけて編纂された漢語(華)と他の諸言語(夷)との2言語対訳教科書の総称である。1407年(明・永楽5)、外交文書の解読翻訳を任務とする四夷館で9言語について作成されたものは、対訳語彙集の「雑字」、文例集の「来文」から成る。本資料はその女直(女真)語のものである(原資料は公益財団法人東洋文庫所蔵)。

「雑字」では、大きく書かれた漢語の単語の右側に対応する女真文字の女真語、左側にその女真語の発音を漢字音写で示す。「来文」は女直の有力者が明に充てた漢文文書とその女真文字女真語訳が対になっている。金が13世紀にモンゴル帝国によって滅ぼされた後も女真文字が使われていたことが分かり、解読の手がかりともなった。なお、女真語が清で用いられた満洲語と近い関係にあるため、女真文字はほぼ解読されている。

25 房山十字寺石刻^{ぼうざんじゅうじせつこく} [拓本]

13世紀末 元

1919年、北京市南西の房山^{ぼうざん}の十字寺の遺跡で発見された石造物で、蓮華の上に乗る縦横の長さが等しい十字架(ギリシア十字)のまわり4カ所にシリア文字が縦書きで刻まれる。全体で「汝これをおおぎ見てこれにより希望を得よ」の意味になるという。

14世紀のモンゴル帝国・元の時代、この地に景教(ネストリウス派キリスト教)寺院・十字寺があった。ネストリウス派はギリシア十字を用い、また聖書をシリア文字のシリア語に訳している。この資料は、それらを反映していると考えられる。

26 敦煌出土のソグド文書簡 [写真]

6世紀 北魏

イギリスの Stein (Stein) が敦煌北方にある古代の見張り台の遺跡で発見した、紙に書かれたソグド文の書簡。文中には「内地へ行ったソグド人たちから聞いた様子を申し上げますと、最後の天子は飢饉のためにサラグ (洛陽) から逃げ出し、宮殿と城は火がつけられました」と中国内乱の様子が記される。これを6世紀の北魏末期の混乱を語ったものとする説が出されている。

イラン系のソグド人は中央アジアのサマルカンドを中心とした地域を根拠とし、中国から東ヨーロッパにいたる広域で交易を行った。アラム文字に由来するソグド文字で書かれたソグド語は、8世紀のイスラム勢力勃興まで中央アジアの共通言語であった。

(Aurel Stein, *Serindia*, 1921, vol.IV, Plate CLIV)

27 ウイグル文『大乗無量寿経』 [写真]

13世紀~14世紀 元

西本願寺の宗主・大谷光瑞^{おおたにこうずい}が派遣した大谷探検隊がトルファン (中国・新疆ウイグル自治区) で発見した断片。13~14世紀モンゴル帝国・元で活躍したトルコ系のウイグル人仏教徒が『大乗無量寿経』のウイグル語訳を木版印刷させたもの。資料は冒頭部分で「南無佛、南無法、南無僧」のあと、インド語、チベット語での経典名をウイグル文字で記している。

ウイグル人はソグド人との交流により、その文字をとりいれて自らの言語を記すようになった。ウイグル文字は、漢文の影響で縦書きに変化していったと考えられる (ただし、行は左から右に進む)。なお現在のウイグル語 (新ウイグル語) はアラビア文字を用いて表記される。

(西域文化研究会編『中央アジア古代語文獻』西域文化研究第4、1961年、図版第三一)

28a 達魯花赤竹君碑 (ジグンテイ碑) (モンゴル文面・額) [拓本]

1338年 (後至元4) 元

28b 達魯花赤竹君碑 (ジグンテイ碑) (漢文面・額) [拓本]

1338年 (後至元4) 尚師簡 (書) 元

14世紀、モンゴル帝国・元の時代の有力王族

コンギラト駙馬家に仕えたジグンテイ (Jigün-tei) という人物の墓前に立てられた石碑 (神道碑)。片面は漢文、もう片面はモンゴル文字モンゴル語で彼の経歴を記す。「達魯花赤」は彼の官職、「竹君」の「竹」は名のジグンテイの冒頭の部分の音訳。

石碑は縦が約4m以上、横幅は約1.5mの巨大なものだが、羽田亨を団長とする1935年の調査時は、烏丹城 (中国・内モンゴル自治区赤峰市翁牛特旗) 内で土に埋もれていたという (現在は所在不明)。展示資料は、両面の額の部分のみの拓本。漢文面は篆書で「大元勅賜故諸色人匠府達魯花赤竹公神道碑銘」、モンゴル文面は「おおせによって立てられた人匠総管府のダルガチ ジグンテイの行なった良き事々を知らしめる碑石である」と記される。

29 青旗報社カレンダー (チンギスカン像)

1940年代前半 満洲国

右下に見える青旗報社とは「満洲国」の首都・新京 (今の吉林省長春) にあった新聞社で、1941年~1945年にモンゴル文字モンゴル語の新聞『Köke Tuγ (フフ・トグ、青い旗)』を発行していた (全178号)。左下にはモンゴル文字で「sine neisilel qubi neilegsen köke tuγ sedgöl-ün qorsiy-a (新京 株式会社 青旗報社)」と記される。下部の白い部分が「めぐり」のカレンダーになっていた。図柄はモンゴル帝国の創立者、チンギス・カンの想像図である。

石濱文庫は『Köke Tuγ』のほぼすべてを所蔵し、全号の紙面画像と記事索引 (1941年分) をインターネット上で公開している。

30 精松源一『新蒙日辞典』

1959年 (昭和34) 日本

1924年に成立したモンゴル人民共和国では、ソビエト連邦の影響下で1940年代からモンゴル語のキリル文字 (ロシア文字) 表記が進められた。この辞書は日本で初めてのキリル文字モンゴル語日本語辞典である。

編者の精松源一^{あべまつげんいち} (1903年~1993年) は、大阪外国語学校 (大阪外国語大学、大阪大学外国語学部の前身) の蒙古語科第一期生で、後に母校の教員となった。石濱純太郎は選科生として彼と同時に入学し、ともにモンゴル語を学んだ。

31 達海之碑 [拓本]

1665 年(康熙 4) 清

後金(1616年~1636年)・清(1636年~1911年)を建てたツングース系満洲人は、モンゴル文字を使って満洲語を記していた。第二代の皇帝ホンタイジは1632年にダハイ(達海)に文字の改良を命じ、彼はモンゴル文字に圈(○印)や点を加え、漢字音を表記する文字も考案して満洲文字が成立した。

「達海之碑」は彼の功績を記すもので、資料はそのおもて面である。真ん中の行が満洲文字、右側がモンゴル文字、左側が漢字。満洲文字の下から3つ目の語が彼の名・ダハイ(Dahai)である。

32 『清語摘鈔』

1889 年(光緒 15) 清

清の末期になっても満洲語は公文書で用いられた。そのため「清語」(満洲語)と漢語との対照語彙集が出版されている。『清語摘鈔』は「官銜名目」(官職の名称)、「衙署名目」(役所の名称)、「摺奏成語」(上奏文での定型表現)、「公文成語」(公文書での定型術語)の4つから成り、それぞれ漢語の下に対応する満洲語が満洲文字で載せられている。

33 仏頂尊勝陀羅尼(居庸関雲台・東壁) [写真]

1345 年(至正 5) 元

北京市の西北60kmの山中にある居庸関は、華北平原とモンゴル高原を結ぶ交通路上の要衝で、モンゴル帝国・元の大カアン(皇帝)トゴンテムルの1343年に「過街塔」が築かれた。その台座「雲台」のトンネルの東西の壁には、仏像の浮き彫りとともに六種類の文字で陀羅尼(呪文)と建立縁起が刻まれている。

図版は東壁の仏頂尊勝陀羅尼で、最上段がディヴァナーガリー文字によるサンスクリット、その次の段がチベット文字チベット語である。以下は縦書きで、右から順に、漢字、西夏文字、ウイグル文字、パクパ文字が並ぶ。チベット文字は、7世紀にチベットの吐蕃のソンツェンカンポ王がインドの文字を参照して作らせた表音文字。30の子音字と4つの母音記号を持ち、左から右への横書きである。

(村田治郎、藤枝晃編著『居庸関』II、1957年、

Plate91)

34a 張氏先塋碑(漢文面・額) [拓本]

1335 年(後至元 1) 許師敬(書) 元

34b 張氏先塋碑(パクパ文字モンゴル文面・額) [拓本]

1335 年(後至元 1) 元

28と同じく、羽田亨を団長とする1935年の調査で採られた拓本である。高さ5m以上の石碑は烏丹城(中国・内モンゴル自治区赤峰市翁牛特旗)郊外に立っていた。1335年に当時のモンゴル帝国・元の大カアン(皇帝)のトゴンテムルの命で立てられた張応瑞なる人物の墓碑で、片面は漢文、もう片面はモンゴル文字モンゴル文である。ここに示す漢文面の額には「大元勅賜故榮祿大夫遼陽等処行中書平章政事柱国追封薊国公張氏先塋碑」、モンゴル文面の額にはパクパ(パスバ)文字で漢文面の音訳が記されている。

パクパ(パスバ)文字は、13世紀に元のクビライ・カアンがチベット僧のパクパに作らせた。チベット文字をもとにした表音文字で、縦書きで行は左から右に進む。

35 Köl Tāgin 碑(突厥文面) [写真]

732 年 東突厥第二可汗国

6世紀に勃興して中央ユーラシアを支配したトルコ系の突厥帝国は東西に分裂した。唐により一時滅ぼされた東突厥は7世紀末には復興し、ビルゲ・カガンと弟のキョル・テギン(Köl Tāgin)の時期に最盛期を迎えた。キョル・テギンの没後立てられた石碑はモンゴル国のオルホン河畔に現存する。突厥文字トルコ語と漢文が刻まれ、東突厥の歴史、彼の事跡が記される。19世紀末にロシアのラドロフらの調査報告書で知られるようになり、デンマークのトムセンが解読に成功した。

突厥文字は古代ゲルマンのルーン文字に似ているため、「トルコ・ルーン文字」とも呼ばれる。表音文字で約40字、原則として右から左に書くが、この碑では漢文に合わせて右端の下から縦向きに記されている。額の部分には部族の標識「タムガ」が刻まれている。

(B.V. Радлов, *Атласъ древностей Монголии*, вып. I, XVII (ラドロフ『モンゴル古代遺物図録』第

1分冊、1892年))

36 石浜恒夫『ふあざあくうすの海—父とひとり娘の大西洋横断記』

1978年(昭和53) 個人蔵

石浜恒夫(1923年~2004年)は、石濱純太郎の長男で作家。大学在学中の学徒動員で戦車連隊に配属され、司馬遼太郎(大阪外国語学校蒙古語科在学)と知り合い、交友は終生続いた。戦後、川端康成の内弟子となる。小説『らぶそでい・いん・ぶるう』や「こいさんのラブ・コール」などの作詞、テレビドラマの脚本で知られる。石濱純太郎の没後、恒夫ら遺族の厚意により旧蔵書が大阪外国語大学に「石濱文庫」として収まることとなった。

本書は、1977年に娘の石浜紅子らとともにヨットで大西洋を無寄港横断した経験を記したものの。

37 藤澤南岳『泊園塾則』

1870年(明治3)

漢学塾・泊園書院(泊園塾)は、江戸時代後期に藤澤東咳により大坂で開かれ、子の藤澤南岳、孫の藤澤黄鵠・藤澤黄坡により、明治・大正・昭和にかけて栄えた。石濱純太郎は、十歳で入塾し漢学を学んだ。また純太郎の姉が藤澤黄坡の妻となったこともあり、後には親族としても泊園書院の運営に協力した。書院の蔵書は、後に関西大学に収められ「泊園文庫」となった。

『泊園塾則』は、1870年(明治3)に藤澤南岳が仕えていた高松藩主・松平頼聡の命により高松に泊園塾を開いた際に作成したもの。後に大阪の泊園書院でも基本方針となった。

38 石濱純太郎ほか編『泊園』の編集原稿

1927年(昭和2)~1943年(昭和18)

『泊園』は泊園書院の動向を伝えるタブロイド判の新聞で、各号おおむね4ページ、ほぼ毎月、1927年(昭和2)から1943年(昭和18)まで合計78号が刊行された。石濱純太郎は編集の統括に当たり、多くの記事を寄稿している。展示資料は、編集の際に寄稿された原稿を集めて箱に収めてあったもの。

『泊園』の全号の復刻が、石濱が初代所長を務めた関西大学東西学術研究所から刊行されている。

る。

39 画家・小出檜重からののはがき [写真]

1917年(大正6)1月5日 個人蔵

石濱純太郎は1901年(明治34)、新設の大阪府立市岡中学校(旧制。現在の府立市岡高等学校)に入学した。同級生に小出檜重(1887年(明治20)~1931年(昭和6))がいた。小出は東京美術学校(現在の東京芸術大学)に進んで洋画家をめざすが、市岡中学校の同期生たちは彼を理解し応援し続けた。特に石濱は失意の時期の小出を激励し、彼のヨーロッパ旅行(1921年(大正10))の際には送金手続きにあたるなど親密な関係にあった。小出は「Nの家族」でデビューし、関西洋画壇の中心となった。

小出から石濱に充てた書簡・はがきが現存し、小出自筆の絵が描かれているものも多数ある。展示資料は、市岡中学校同窓生の似顔絵を描いたはがきで、ローマ字で名前も記してある。前列左端が小出、前列真ん中の丸顔の人物が石濱である。作曲家・信時潔(40の人物)も最後列の右から2人目に見える。

(大阪市史編纂所『小出檜重の手紙—石濱純太郎宛書翰集—』、2012年、参考14)

40 作曲家・信時潔からののはがき

1906年(明治39)4月17日

信時潔(1887年(明治20)~1965(昭和40))

も、石濱純太郎、小出檜重らとともに大阪府立市岡中学校の第一期入学生である。東京音楽学校(現在の東京芸術大学)に進み、チェロと作曲を学ぶ。ドイツ留学後、母校の教授となった。「海道東征」「海ゆかば」や多数の校歌の作曲で知られる。

展示資料は1906年(明治39)4月、東京音楽学校予科に在学中の信時が、旧制高等学校受験準備のために東京に移った石濱に充てたもの。自分の下宿を訪ねてくるよう促しており、親密な関係がうかがえる。二人の交友は戦後にいたるまで長く続いた。

41 市岡中学校の定期試験問題

1901年(明治34)~1906年(明治39)

石濱純太郎が大阪府立市岡中学校に在学していた時期(当時の旧制中学校の修学年限は5年間)

の定期試験問題（2～3年次）。問題は数学2枚（代数、幾何）、地理2枚、歴史3枚（日本史2、東洋史1）、生物5枚（生理科2、博物科1、動物科2）の合計13枚が残っている。1科目あたりの試験時間は1時間半～2時間だったらしい。

「地勢ト気候ノ関係ヲ西伯利亞ニ就テ記述スベシ」(地理)、「応仁乱ノ結末ヲ問フ」(日本史)、「鴉片戦争ノ始末如何」(世界史)、「腎臓及附属物ヲ図解セヨ」(生理科)など、旧制中学校の教育レベルを知る手がかりとなる。

42 石濱純太郎「^{おうようしゅうこうきゅう}欧陽修攻究」(卒業論文)

1911年(明治44)

東京帝国大学文科大学支那文学専修での石濱純太郎の卒業論文(原本)。中国・北宋の文人政治家・欧陽修の生涯と著作を分析検討している。すべて漢文で記されており、審査に当たった岡田正之助教授、黒木安雄講師による文章の訂正と批評が朱・青・淡墨の筆で各所に書き込まれている。

なお、黒木安雄はフランスのペリオ探検隊がもたらした敦煌文献の写真を授業で用い、石濱が中央アジア探検の成果に興味を持つきっかけになったという。

43 ^{おかだまさゆき}岡田正之「^{しなぶんがくがいろん}支那文学概論」[受講ノート]

1908年(明治41)～1909年(明治42)

石濱純太郎(筆記)

石濱純太郎は1906年(明治39)3月に大阪府立市岡中学校を卒業した。旧制高校の入学試験に失敗の後、1908年(明治41)8月に旧制第一高等学校で行われた試験に合格し、「大学予科卒業生ト同等ノ学力アリト認定シタル者」として、3年制の旧制高校を経るより1年早く、10月に東京帝国大学文科大学に入学した。3年後の1911年(明治44)年7月に文学科(支那文学専修)を卒業した(当時の帝国大学の学年は9月～7月)。

石濱の指導教員であった岡田正之助教授によるこの「支那文学概論」では、上古文学(唐虞夏殷周時代)から清朝時代までが構想されているが、石濱によるこの受講ノートは上古文学のみで終わっている。なお石濱文庫には、彼が大学で受講した講義科目の大部分のノートが現存する。明治末年の東京帝大の支那文学専修での具体的な修学内容を知り得る資料である。

44 ^{おおつかやすし}大塚保治「^{びがくがいろん}美学概論」[受講ノート]

1909年(明治42)～1910年(明治43)

石濱純太郎(筆記)

1900年(明治33)に東京帝国大学に日本で初めて開設された美学講座の大塚保治教授による講義の筆記。大塚は夫人の大塚楠緒子とともに夏目漱石との交流でも知られ、美学者であることから『吾輩は猫である』に登場する美学者の「^{めいていせんせい}迷亭先生」のモデルともいわれた。

石濱の在学当時の支那文学専修では「支那語学、支那文学」の諸科目のほかに、言語学、文学概論、心理学、美学、哲学概論が必修科目となっていた。

45 石濱の卒業論文に利用された^{なつめそうせき}夏目漱石『^{ぶんがくひょうろん}文学評論』[パネル展示]

1909年(明治42)

石濱純太郎の卒業論文『欧陽修攻究』(42の資料)で注目されるのは、「序論」の中で夏目漱石(1867年～1916年)の『文学評論』を利用していることである。石濱が利用した夏目漱石『文学評論』序言の該当部分と、石濱の卒業論文『欧陽修攻究』序論を対照すると、石濱は『文学評論』序言の内容を読み込んだうえで要約していることが分かる。

東京帝国大学文科大学の英文学の講師であった夏目金之助(漱石)は1905年(明治38)秋から、この「文学評論」(十八世紀英文学)の講義を始めたが、1907年(明治40)には講師を辞職して朝日新聞に入社した。英文学にも興味があった石濱は翌年の1908年(明治41)の入学であり、漱石とは入れ違いとなった。なお、夏目漱石の『三四郎』や『こころ』で描かれている大学生の生活は、石濱の大学生時代のものである。

46 ^{にしむらてんしゅう}西村天囚ほか『^{けいしゃきじ}景社紀事』

1911年(明治44)～1917年(大正6)

^{にしむらてんしゅう}西村天囚が興した大阪の文会(自作の漢文を持ち寄り、批評する会)である「^{けいしゃ}景社」の規約、同人一覧、例会の活動を西村ら同人が漢文で記録したもの。1911年(明治44)2月の結成から、1917年(大正6)9月の会合までが記される。石濱文庫から2018年に発見された。全ページの画像が『懷徳堂研究』14号(2023年)に公開されている。

西村天囚（1865年（慶応1）～1924年（大正13））は、本名は時彦、漢学者、ジャーナリスト。明治末年から「懷徳堂記念会」の結成ほか懷徳堂の復興に尽力した。朝日新聞のコラム「天声人語」の命名者としても知られる。

「景社」は、京都の文会「麗澤社」と連合会も開いている。1916年（大正5）4月25日に枚方の占春楼で開かれた第二回連合会で、石濱純太郎も西村の紹介で入社するとともに、師と仰ぐことになる内藤湖南（虎次郎）と出会った。

47 西村天囚『碩園先生文集』

1936年（昭和11）

西村天囚は、「天囚」の他にも「碩園」の号を名のった。1924年（大正13）の彼の没後、旧蔵書は理事を務めた懷徳堂記念会に寄贈されて「碩園記念文庫」となった。懷徳堂記念会は、彼の遺文を集めて『碩園先生文集』を1936年（昭和11）に刊行した。

なお西村天囚ら多くの人の尽力により復興した懷徳堂記念会の「重建懷徳堂」（大阪市中央区本町橋にあった）は、江戸時代の懷徳堂の蔵書の一部、復興に当たり収集した和漢の書籍、西村ら関係者の旧蔵書を合わせて三万六千冊を所蔵していた。大阪大学附属図書館の「懷徳堂文庫」はそれらを引き継ぐものである。

48 『航欧集』

1926年（大正15）

京都帝国大学の東洋史学の教授であった内藤虎次郎（湖南）は、懷徳堂記念会顧問を務め、重建懷徳堂での講演も多い。彼は1924年（大正13）7月から翌年2月にかけて、ヨーロッパ各地の研究機関が所蔵する敦煌文献の調査旅行に出かけた。その際に国内外の人物と応酬した漢詩文を取めたもの。

「敦煌文献」とは、中国・甘肅省の敦煌の郊外にある石窟寺院・莫高窟千仏洞の「蔵経洞」ほかから得られたもの。唐時代以前の漢語、チベット語、ウイグル語、ソグド語などの文献の発見は、東洋学に大きなインパクトを与えた。

49 重建懷徳堂25周年記念式典写真 [パネル]

1941年（昭和16）10月11日 懷徳堂記念会所蔵

1916年（大正5）に完成した「重建懷徳堂」が1941年（昭和16）に25周年を迎えた記念式典での写真。講堂入口にかけられた幕の右端の「学」の字のところに石濱純太郎の姿が見える（口ひげの人物）。

当時、石濱は懷徳堂記念会の役職には就いていなかったが、彼が主催する東洋学の研究会「静安学社」は重建懷徳堂を活動の場としていた。1934年（昭和9）に中国の清華大学からの視察団がここを訪れた際の外務省記録には「静安学社（事務所＝重建懷徳堂内、石濱純太郎代表）」とある。

50 内藤虎次郎（湖南）からはがき

1928年（昭和3）4月20日

内藤湖南が1928年（昭和3）4月20日に石濱に充てたはがき。4月29日に静安学社で行う予定の講話のタイトル「支那近代の地図、特に満洲地方の地図に就て」を知らせるもの。京都帝国大学を定年退官した後、内藤は京都府相楽郡瓶原村（現在の木津川市加茂町）に「恭仁山荘」を建てて隠棲していた。

51 石濱純太郎のパスポート（裏面）

1924年（大正13）

1924年（大正13）7月からの内藤湖南のヨーロッパ調査旅行には、湖南の長男の内藤乾吉、女婿の鴛淵一のほか、石濱純太郎も同行して調査を助けた。石濱は「御洋行の話聞いて、…こんな時に日夕親炙したらよからうと御伴を願って快諾された…約八カ月影の形に随ふ如く御供して益々先生の偉らさに驚いた」と後に書いている。

一行は船便で上海、香港、コロンボ、エジプトを経て、マルセイユ（フランス）から上陸し、パリ、ロンドンのほか、ドイツ、オーストリア、スイス、イタリアの各地をめぐる。パスポートの裏面に押されたスタンプから一行の行程をたどることができる。

52 桑原隲蔵からの書簡・はがき

1921年（大正10）10月7日、8日

内藤湖南とともに京都帝国大学の東洋史学の教授であった桑原隲蔵（1870年（明治3）～1931年（昭和6））が、代表作『蒲寿庚の事蹟』の改訂にあたり、パクパ文字による漢字音表記について、

関係業績のある石濱に問いあわせたもの。

桑原は『蒲寿庚の事蹟』で、マルコ・ポーロ『世界の記述(東方見聞録)』の中の南宋の旧都(現在の浙江省杭州)の名称「キンサイ(Quinsai)」が、これまでのポーチェ(Pauthier)やユール(Yule)の研究では「京師」の音訳とされていたのに対抗して「行在(天子の外出先)」の音訳であると主張していた。現在では桑原の説の妥当性が認められている。

53 『羽田博士頌寿記念東洋史論叢』献呈式写真

1950年(昭和25)11月 個人蔵

羽田亨(1882年(明治15)~1955年(昭和30))は、東京帝国大学で白鳥庫吉しらとりくらきちに師事し、京都帝国大学の東洋史学の教授、後に総長、また東方文化研究所(現在の京都大学人文科学研究所)所長を務めた。ウイグル、モンゴルなどの内陸アジア史、敦煌文献・ウイグル語文献の研究で知られる。大阪外国語学校にも出講していた。そのころ蒙古語科選科生だった石濱は、1922年6月の「支那学会」で羽田に初めて会っている。

受業生らから羽田に献呈された論文集の東方文化研究所玄関での献呈式記念写真で、最前列の中央が羽田亨、その右が石濱純太郎である。藤枝晃(66の人物)も第二列の左端に見える。(礪波護ほか編『京大東洋学の百年』2002年、p.156)

54 『元朝秘史』写本 20世紀初

『元朝秘史』は、13世紀のモンゴル帝国の創立者チンギス・カンの一代記を中心とし、前後にモンゴルの始祖伝承と二代のオゴデイ・カンの事績を加えてモンゴル語で記したもの。現在はモンゴル語を漢字で音訳した本文と、その右に付された漢語の逐語訳、節ごとの口語の漢語で記した大意訳との、3つの言語並記の形で伝わる。

この書の存在を知った内藤湖南らは清の学者・文廷式ぶんていしきに写本入手の希望を伝えていた。1901年に写本を受け取った内藤は何部か副本を作らせ、その一つを受け取った那珂通世なかにみちよ(1851年(嘉永4)~1908年(明治41))が世界初の訳注となる『成吉思汗実録』を1907年(明治40)に刊行した。石濱が所蔵した写本も内藤から贈られたものと推定される。

55 山片蟠桃『夢の代』写本

19世紀

懐徳堂に学んだ大坂の町人学者・山片蟠桃(1748年~1821年)の著作で、1820年(文政3)に完成。天文・地理・神代・歴代・制度・経済・経論・雑書・異端・無鬼(上下)・雑論の十二巻から成る。地動説、神話と歴史の区別、経済の自由、無神論などの主張は近代合理主義思想の先駆けと評される。

師の内藤湖南を承けて、石濱も富永仲基とあわせて山片を高く評価した。この『夢の代』写本には、石濱が研究した書き入れが見える。

56 石濱純太郎の大阪外国語学校入学を伝える新聞記事 [パネル]

1923年(大正12)11月8日『関西日報年中無休刊』

1922年(大正11)4月、石濱は新設の大阪外国語学校蒙古語科にただ一人の選科生として入学した。当時は「赤門出の文学士」(「あかもんで」とは東京帝国大学の卒業生)が専門学校で学生として学んでいること自体が珍しく、しかも学んでいるのが珍しい「蒙古語」(モンゴル語)ということで、新聞記者が取材したものだろう。石濱は36歳、蒙古語部の新入生の平均年齢は19歳。

記事中の「今度の震災」は2か月前9月の関東大震災、「浦川文学士」は漢文担当の浦川源吾、「社会学の高田博士」は高田保馬。「参考資料が全部烏有に帰して」が何を指すかは不明だが、東京帝大所蔵モンゴル文大蔵経の焼失を指すのかもしれない。

57 ニコライ・ネフスキーからの書簡

1933年(昭和8)以降の11月24日

ニコライ・ネフスキー(1892年~1937年)は、ソビエト連邦(ロシア)出身の東洋学者。ペテルブルク大学卒業後、日本に留学し、折口信夫、柳田国男、金田一京助らについて学び、民俗学・言語学の研究を進めた。小樽高等商業学校(現在の小樽商科大学)、後に大阪外国語学校のロシア語担当講師となった。そこで知り合った石濱純太郎の勧めで、ともに西夏文字・西夏語を研究した。1929年(昭和4)に帰国して母校の教員となったが、1937年にスターリンの粛清により、日本から呼び寄せた妻とともに殺された。

ネフスキーは帰国後も、西夏研究のために石濱と書簡や研究資料のやりとりを続け、それらは石濱文庫に残されている。この書簡ではコズロフ探検隊の発見資料から西夏語訳の宋・呂恵卿「孝経伝」を見つけたことを報じている。石濱は彼の死が知らされた後に、「西夏語訳呂恵卿孝経伝」(1956年)を発表した(22の資料)。

58 柳田国男からののがき

1943年(昭和18)7月23日

柳田国男(1875年(明治8)~1962年(昭和37))からの、石濱の『東洋学の話』(1943年刊)を受け取ったことへの礼状。書中の「西夏語研究の話」に載るネフスキーのことを思い出したこと、消息は分からぬが難儀しているだろうとの推測、彼のかつての「オシラサマ」調査のことなどが記されている。1951年(昭和26)、柳田は彼の死を知って大阪外国語大学で「ねふすきいを偲ぶ」と題して講演している。

ネフスキーの死の正確な情報はなかなか公表されなかったが、1957年になって名誉回復、1960年に著書『西夏文献学』刊行、1962年にレーニン賞が授けられた。

59 ニコライ・ネフスキー肖像、大阪外国語学校校舎 [パネル]

20世紀前半

ネフスキーがロシア語担当講師として在職当時の卒業アルバムからの写真。大阪外国語学校は1921年(大正10)に設置、翌年4月から授業が開始された。場所は大阪市東区上本町8丁目(現在は天王寺区。跡地に大阪国際交流センター)。中国語・モンゴル語・マレー語・インド語・英語・フランス語・ドイツ語・ロシア語・スペイン語の9語部があった。

ネフスキーは開校当初から1929年(昭和4)年8月まで、その任にあった。学者らしいユーモアなうちにも生徒を引っ張っていく厳格な授業で、ロシア語のみで日本語は話さず、発音記号を板書して説明したという。

60 石濱純太郎「日本漢学史 徳川時代」[関西大学講義ノート]

1941年(昭和16)

石濱は、大正末年から何度か関西大学の講師をつとめ、戦後の1949年(昭和24)には関西大学文学部教授に就任した。著書『支那学論攷』により、関西大学で文学博士の学位を受け、1958年(昭和33)に定年退職し、名誉教授となった。

この講義ノートは1941年度(昭和16)4月の旧制の関西大学専門部国語漢文科での「日本漢学史 徳川時代」講義のために作成されたもので、藤原惺窩から始まり水戸学までを扱っている。計2冊のノートに別紙のメモを加えながら、新制の関西大学文学部国文学科でも5年間にわたり用いていた。

61 石濱純太郎「Historical Sketch of the Central Asian archeological Exploring I」[龍谷大学講義ノート]

1930年(昭和5)

石濱は1928年(昭和3)龍谷大学史学科の講師を務めた後、1935年(昭和10)には非常勤のまま史学科東洋史学の主任代理を委託されるなど、龍谷大学の信任が厚かった。そこでの講義用のノートの一つ。

「Historical Sketch of the Central Asian archeological Exploring I」(中央アジアの考古学的探検の歴史的概観1)は、19世紀末から20世紀初めのヨーロッパ諸国による中央アジア考古学探検史の概略を日本語で記している。イギリスのスタインによる1次~3次探検、フランスのペリオによる探検、フランスのアフガニスタン調査、ドイツの1次~4次トルファン調査が扱われている。

62 石濱純太郎「欧洲の西伯利亚研究史」[京都帝国大学講義ノート]

1941年(昭和16)

石濱が1941年度(昭和16)に京都帝国大学文学部で行った東洋史特殊講義のためのノート。欧洲(ヨーロッパ)とあるが、ロシアのシベリア研究史が参考文献とともに詳細に記されている。日本で本格的にロシアのシベリア研究が語られた最初期のものとして注目される。

石濱は、1937年(昭和12)以来、1951年(昭和26)まで、京都帝大文学部の講師を務めた。石濱文庫には、この「欧洲の西伯利亚研究史」の他

にも 1941 年度 (昭和 15) の「Studia Tibetica」(チベット研究)が保管されている。

63 石濱純太郎「西夏語仏典の話」[高田派専修寺本山文化講座講演ノート]

1934 年(昭和 9)

1934 年(昭和 9) 8 月に、三重県津市一身田町にある真宗高田派本山・専修寺で行われた夏期文化講座での 5 回連続講演のためのノート。西夏および西夏語資料の発見と研究について語られている。石濱がここで講演したのは、彼の友人・武内義雄(1886 年～1966 年。中国哲学、東北大学教授)が真宗高田派の願誓寺の出身であった縁と思われる。

石濱はほぼ同内容の講演を京都帝大の言語学談話会(1933 年 5 月)、大谷大学聖典語学会(同年 10 月)、大阪外国語学校での大阪東洋学会(同年 10 月)でも行った。これらの内容に註を加えたものが、著書『東洋学の話』(1943 年(昭和 18))に「西夏語研究の話」として収録されている。

64 『静安学社通報』第一期

1927 年(昭和 2)

「静安学社」は 1927 年(昭和 2) 6 月に高橋盛孝、石濱純太郎、ニコライ・ネフスキーらが大阪で結成した東洋学の研究会である。ネフスキーの提案で、その名称に皆が尊敬する王国維(5 の人物。この直前に亡くなっていた)の字の「静安」をつけることとした。

『静安学社通報』第一期には、規約やメンバー、活動記録が載せられている。研究会は石濱と高橋を幹事として、会合が毎月一回(3, 7, 8, 12 月を除く)重建懐徳堂で行われた。1945 年(昭和 20)の大阪大空襲で重建懐徳堂が書庫を残して焼失した後も、関西大学天六学舎などで何年か続けられた。

65 『大阪言語学会要覧』

1949 年(昭和 24)

世界諸言語の研究を目的とし、大阪附近在住のものを会員とした大阪言語学会が、1942 年(昭和 17)に創立された。本資料は、会則、1942 年 2 月から 1948 年(昭和 23) 11 月までの研究例会記録、備考、会員名簿(39 名。ほか死亡会員 4 名)

から成る。例会は重建懐徳堂のほか、戦後は大阪外事専門学校(大阪外国語学校が 1944 年に改称)で行われている。石濱は初回の「ツングース諸族に就いて」のほか、計 12 回の報告を行っている。

66 藤枝晃「沙州帰義軍節度使始末」[抜刷]

1941 年(昭和 16)～1943 年(昭和 18)

藤枝晃(1911 年(明治 44)～1998 年(平成 10))は、東洋学者。京都帝大の東洋史で学んだ後、1943 年(昭和 18)年に北京市郊外にある 14 世紀の建造物・居庸関雲台(33 を参照)の調査に参加し、翌年には張家口(河北省)の西北研究所で梅棹忠夫(民族学・文化人類学)らと調査・研究に当たった。戦後は京都大学人文科学研究所で、漢代の木簡、敦煌文献の共同研究班を主宰し、多くの成果をあげた。

「沙州帰義軍節度使始末」は、9～11 世紀に沙州(敦煌)を支配した「帰義軍節度使」の張氏の盛衰を研究した藤枝の代表作の一つである。彼は大学生時代には帰省の度に「石濱サロン」に加わっていた。石濱の手がけた学問の一つ「敦煌学」を継いで大成したといえる。

「昭和の一〇年代、私は夏冬の休暇などに住吉の宅に帰省するごとに、ほど遠からぬ石濱邸に押しかけて行くのが、大きな楽しみであった。得体の知れない研究に凝っている同じ年配の青年、言わば町人学者たちの卵が、しばしば来合せる。すると、先生の甥で、同家にトグロをまいていた藤澤桓夫氏も加わる、という次第で、ワイワイ大騒ぎになる。帰省とは、私にとっては、親もとに帰るといふより、石濱サロンに出るためのものであった。」

(藤枝晃「町人学者・石濱純太郎」『図書』234 号、岩波書店、1969 年 2 月)

67 長田夏樹「中国諸民族の言語」[抜刷]

1959 年(昭和 34)

長田夏樹(1920 年(大正 9)～2010 年(平成 22))は、東洋言語学者。東京外国語学校蒙古語部を卒業後、1944 年(昭和 19)年に蒙古連合自治政府の調査官として張家口(河北省)の蒙古文化研究所に勤務し、藤枝晃とも知り合った。戦後は神戸市外国語大学教授(中国語)を務めた。

石濱純太郎に認められて 1949 年(昭和 24)に

大阪言語学会で「トルコ・モンゴル比較言語学方法論について」を報告し、女真語、契丹語、西夏語の研究に取り組んだ。中国語や日本語に関わる著作なども含めて多くの業績を残した。この論文は、隋代の諸民族の分布が現在の少数民族の自治区などの分布とほぼ一致することを記す。

68 おおばおさむ 大庭脩「漢律における「不道」の概念」[抜刷]
1957年(昭和32)

大庭脩(1927年(昭和2)～2002年(平成14))は東洋学者。旧制浪速高等学校(大阪大学の前身校)を経て、龍谷大学で東洋史を学ぶ。そこでは石濱も講師として教えていたが、後に関西大学文学部で石濱と大庭脩は同僚となる。

大庭は木簡資料を使った漢代の法制史のほか、古代から近世にいたる日中関係史、特に書物の輸入史の研究で知られる。石濱を代表者とする研究計画「江戸時代京阪における漢学の研究」への参加が、代表作『江戸時代における中国文化受容の研究』につながった。

69 にしだたつお 西田龍雄「西夏語の数詞について」[抜刷]
1959年(昭和34)

西田龍雄(1928年(昭和3)～2012年(平成24))は、東洋言語学者。大阪外事専門学校(大阪外国語学校が1944年に改称)で中国語を学んだ後、京都大学文学部で言語学を専攻し、京大で言語学の教授を務めた。チベット・ビルマ語の研究、西夏語の研究、各種の「華夷訳語」の研究のほか、文字研究や日本語の系統に関する研究で知られる。

西田は1948年(昭和23)ころ石濱の蔵書を利用しながらチベット・ビルマ語研究を始め、石濱から西夏語研究の手ほどきを受けた。漢語音韻学の知識と構造言語学の分析手法を駆使して資料データを整理し、西夏語の音韻体系や西夏語の文字組織を解明した。石濱やネフスキーが部分的にしか成し得なかった西夏文字の解読は、西田によって成された。この論文は西田の西夏語研究の初期のものである。

70 ふじさわたけお 藤澤桓夫からののはがき
1932年(昭和7)8月17日

藤澤桓夫(1904年(明治37)～1989年(平成

1))は、泊園書院の漢学者・藤澤黄坡(章次郎)と石濱純太郎の姉・カツとの子。新感覚派、またプロレタリア文学の作品を発表したが、病を得て東京から大阪に戻り、関西を代表する小説家となった。映画・テレビドラマにもなった代表作の『新雪』(1942年(昭和17))に登場する学者は、石濱をモデルとしているという。

はがきは藤澤が療養先のサナトリウムから送ったもの。この後、彼は石濱邸の“離れ”に住み、彼のもとに織田作之助、漫才作家の秋田実ら文芸関係者も集うようになった。石濱の長男・恒夫(36の人物)が作家となったのは、この環境に刺激されたものと思われる。

71 おださくのすけ 織田作之助からののはがき(2通)

1944年(昭和19)8月10日、1946年(昭和21)2月18日

織田作之助(1913年(大正2)～1947年(昭和22))は大阪市出身の作家・評論家。代表作の小説『夫婦善哉』(1940年(昭和15))発表の翌年、藤澤桓夫と知り合ったことが石濱邸に出入りするきっかけとなったと思われる。

はがきは織田作之助の最初の妻・一枝の会葬御礼(1944年8月10日)と、笹田和子との再婚通知(1946年2月18日)。彼の関係資料は、石濱文庫では現在この2点が確認されている。